戦死した兄の本箱

忘れられない一冊

志茂田景樹

しもだ・かげき＝1940年生まれ。作家。著書に『黄色い牙』『蒼翼の獅子たち』など。

父が国鉄（現JR）職員だったため、小学校を卒業するまで、その官舎で育った。三畳間があって座り机と両開きの本箱があった。

兄の部屋で、兄は昭和二十年夏、当時は満州と言った現在の中国東北部で戦死した。その翌年、僕は小学校に入った。その頃から学校から帰ると、掃除の時以外は母さえ入らなかった兄の部屋へ入り、本箱の前に座り、その両開きの扉を開けるのが日課になった。

開けると、五歳で別れた兄の匂いがモーッと溢れ出てきて兄の肉声を聞いたような心地だった。読めもしないくせに目についた背表紙の本を抜き取ってはページをぱらぱらめくった。押し花や、栞が落ちる。拾って匂いを嗅いだ。兄の思い出を嗅ぎ取ろうとしたのかもしれない。詩集や、歌集が多かった。

箱入りの本があって、『ベルレーヌの詩』というタイトルだった。その詩集を頻繁に抜いて広げたのは、各ページの充分な余白に兄の自作の詩歌が書き込まれていたからだった。

やや崩されて書かれていたから、むろん、読み取れはしない。しかし、大人の小説もこっそり読むようになった四、五年生の頃には読めるようになった。小学校を卒業する頃にはベルレーヌの詩も兄の詩、短歌も諳んじていた。

大学生の頃である。バイト先で知り合った他大学の学生がいて、ベルレーヌの詩が好きな文学青年で、バーなどで諳んじて聞かせた。僕も「まだ朝の光は」は諳んじられると言うと、じゃそらで言ってみろよ、と迫られた。諳んじると、へへへと小馬鹿にして笑った。

「最後の小節がでたらめじゃないか」

「そんなことはないよ」

「どう聞いてもベルレーヌの言葉じゃないよ。上っ調子の短歌みたいだ」

「そうかなあ」

ちゃんと諳んじている自信があったので、帰宅するなり兄の遺品でもあるその詩集を広げた。「まだ朝の光は」の最後の小節は（暗いそなたの眼をお向け　空は藍色に　～おゝ何と云ふ喜ばしさよ）だった。その下の余白に兄の肉筆で、（神経の病める我をばいたはりつ　友愁ひ見る　そが嬉しさよ）とあった。

ベルレーヌの詩と兄の短歌をないまぜにして諳んじていたのである。その箱入りの詩集は今も手許にある。